

サポートの互恵性と精神的健康との関連に対する個人内発達の影響¹⁾

- 利得不足志向性及び利得過剰志向性の発達の变化 -

谷口 弘一(日本学術振興会・岡山大学)

田中 宏二(岡山大学教育学部)

本研究の目的は、Sprecher(1992)が作成した利得不足志向性および利得過剰志向性尺度の改訂日本語版の信頼性および妥当性を検討し、さらには両志向性の発達差ならびに性差を検討することであった。利得不足志向性は、相手に与えた利益よりも少ない利益を自分が得ていることに対して、どの程度、関心があるかを表し、利得過剰志向性は、相手に与えた利益よりも多い利益を自分が得ていることに対して、どの程度、関心があるかを表す。予備調査には、102名の高校1年生、100名の中学2年生、109名の小学6年生、本調査には、262名の高校1年生、223名の中学2年生、248名の小学6年生がそれぞれ参加した。項目分析の結果、各13項目からなる利得不足志向性尺度($\alpha = .83$)と利得過剰志向性尺度($\alpha = .83$)が作成された。発達差に関しては、小学生の男子が中学生の男子よりも利得過剰志向性が高かった。性差に関しては、男子が女子よりも利得不足志向性が高く、女子が男子よりも利得過剰志向性が高かった。

キーワード: 利得不足志向性、利得過剰志向性、小学生、中学生、高校生

問題

Taniguchi & Ura(2002)は、児童期と青年期という2つの異なる年齢層の友人関係を取り上げ、個人内発達が、友人関係におけるサポートの互恵性と精神的健康との関係に対してどのような影響を与えているかを検討した。その結果、小学生よりも高校生において、サポートの互恵性が抑うつと有意な関連を持っていた。

こうした結果は、楠見・狩野(1986)が指摘しているように、友人概念の発達の变化によって生じたものであると考えられる。彼女らによると、中学生にあたる青年期初期には、友人にサポートを期待する意識が強く抱かれているが、発達にともなって、二人の間の互恵的な関係が重視されるようになり、自分と相手の双方が価値を発揮できる関係こそ友人関係であると考えように変化する。小学生と比較して高校生では、友人関係における互恵性がより重要視されるために、互恵性と精神的健康との間に有意な関連が認められたのであろう。

本研究では、友人概念の発達の变化とは別の要因を取り上げ、個人内発達がサポートの互恵性と精神的健康との関連に対してどのような過程を通して影響を与えているのか、そのメカニズムをより詳細に検討する。

個人内発達がサポートの互恵性と精神的健康との関連に影響を与える要因として、年齢の増加に伴い、友人関係における互恵性の規範が変化すること、友人関係の付き合い方が、数人のグループでの気軽な友だちづきあいから一人の友だちとの深いつきあいへと変化すること(菅原, 1985; 落合・佐藤, 1996)などが考えられる。本研究では、互恵性の規範の発達の变化に焦点を当てる。

Clark & Mills(1979)は、二者の交換を支配する規則あるいは規範に基づき、共同関係と交換関係の2つ

の関係タイプを区別している。共同関係では、利得が相手の欲求に応じて与えられたり、特定の見返りを期待せずに相手を満足させるために与えられる。一方、交換関係では、過去に受け取った何らかの利得によって生じた借りを返すためや、将来に特定のお返しを受け取ることを期待して、利得が供与される。

関係タイプの区別とは別に、それぞれの関係をどの程度志向するかについての個人差変数として、共同関係志向性と交換関係志向性がある(Clark, Ouellete, Powell, & Milberg, 1987)。2つの関係志向性は独立であり、対人関係ごとに関係志向性が異なる可能性もある(諸井, 1993)。すなわち、ある個人を取り巻く全ての対人関係に対して、当該の人が同一の関係志向性を持っているのではなく、例えば、親友との関係に対しては共同志向性が高く、知り合いとの関係では交換志向性が高いという場合も考えられる。

交換志向性の高い人は、他者に利益を提供したとき、即座に同等な利益を期待したり、すぐに返報できない利益を受けたとき、不快に感じたりする。交換志向性は、互恵性と関係満足感あるいは否定的感情との関連に対して調整効果を持つ(Buunk & Van Yperen, 1991; Buunk, Doosje, Jans, & Hopstaken, 1993)。例えば、Buunk et al.(1993)は、交換志向性の高い従業員は、交換志向性の低い従業員と比べて、上司との関係が互恵的でないとき、否定的感情を経験するのを見いだしている。

交換志向性について、Sprecher(1992)は、2つのタイプがあることを指摘している。一つは、利得不足志向性(underbenefitting exchange orientation)であり、もう一つは、利得過剰志向性(overbenefitting exchange orientation)である。前者は、相手に与えた

利益よりも少ない利益を自分が得ているということに対して、どの程度、関心があるかを表し、後者は、相手に与えた利益よりも多い利益を自分が得ているということに対して、どの程度、関心があるかを表す。

本研究では、Sprecher(1992)の指摘に基づいて、利得不足志向性と利得過剰志向性の2つを取り上げ、これら2つの志向性が発達に伴ってどのように変化するかを明らかにする。利得不足志向性と利得過剰志向性のいずれか、あるいは両方が発達に伴って高まるという証拠が得られるならば、それによって、互恵性と精神的健康との関連に対する個人内発達の影響過程の一つが明らかとなる。

予備調査

目的

Sprecher(1992)の利得不足志向性尺度と利得過剰志向性尺度の日本語版を作成し、その信頼性を検討することを目的とする。また、予備的分析として、両志向性得点に発達差および性差が認められるかどうかを併せて検討する。

方法

調査対象者 広島県内の公立高校1年生102名(男子50名、女子51名、不明1名)、公立中学校2年生100名(男子54名、女子46名)、公立小学校6年生109名(男子56名、女子53名)。

調査手続き 各学級担任の先生が、ホームルームや放課後の時間を利用して調査を実施した。調査の実施時期は2003年11月であった。

調査内容 調査用紙には、フェイスシートに記載された回答者の個人的属性を質問する項目の他に、以下に挙げる尺度が含まれていた。(1)利得不足志向性尺度: Sprecher(1992)が作成した利得不足志向性尺度20項目のうち、小・中・高校生が回答するのに不向きな項目を除いた上で、Buunk & Prins(1998)が新たに追加した3項目のうち1つを加えて、全18項目を日本語に翻訳して用いた。調査の実施に先立って、各質問項目の表現が小学生でも理解できるかどうかを確認するため、現職の小学校教諭に校閲を依頼した。被調査者は、最も親しい友だちとの関係を考えたとき、各項目がどの程度当てはまるかについて評価を行った。回答は、“まったく当てはまらない(1点)”から“非常に当てはまる(4点)”までの4件法であった。(2)利得過剰志向性尺度: 利得不足志向性尺度と同様にして、Sprecher(1992)が作成した利得過剰志向性尺度20項目のうち、小・中・高校生が回答するのに不向きな項目を除いた上で、Buunk & Prins(1998)が新たに追加した3項目のうち1つを加えて、全18項目を日本語

に翻訳して用いた。被調査者は、最も親しい友だちとの関係について、各項目がどの程度当てはまるかを、“まったく当てはまらない(1点)”から“非常に当てはまる(4点)”までの4件法で評価した。

結果と考察

利得不足志向性尺度 小・中・高校生のデータをひとまとまりにして、全18項目に対して、因子数を1に固定した因子分析(主因子法)を行った。その結果、13項目が.40以上の因子負荷量を示した(Table 1)。これらの項目の合計点を利得不足志向性得点とした。

係数は.83であった。

利得不足志向性に発達差および性差が認められるかどうかを検討するために、学校種別と性別を独立変数、利得不足志向性得点を従属変数として2要因分散分析を行った(Figure 1)。その結果、学校種別の主効果が有意であった($F(2, 295) = 3.12, p < .05$)。下位検定の結果、小学生よりも中学生の方が利得不足志向性得点が高い傾向が認められた($p = .06$)。高校生の得点と小学生および中学生の得点との間に有意差がなかったことから、明確な判断を下すことは難しいが、予備的分析の結果からは、利得不足志向性が発達に伴って高まる可能性が示唆された。

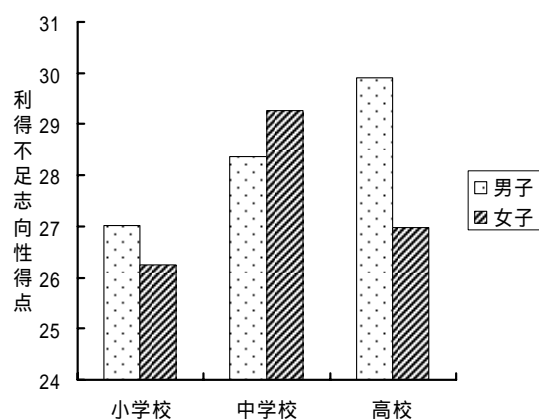


Figure 1 学校種別および性別ごとの利得不足志向性得点

利得過剰志向性尺度 利得不足志向性尺度と同様に、全18項目に対して、因子数を1に固定した因子分析(主因子法)を行った。その結果、13項目が.40以上の因子負荷量を示した(Table 2)。これらの項目の合計点を利得過剰志向性得点とした。係数は.83であった。

発達差および性差が認められるかどうかを検討するために、学校種別と性別を独立変数、利得過剰志向性得点を従属変数として2要因分散分析を行った(Figure 2)。その結果、学校種別の主効果($F(2, 290)$

Table 1 利得不足志向性尺度の因子分析結果

質問項目	因子負荷量
19. 友だちにしてあげることより、友だちがしてくれることの方が少ないときは、いらいらする。	.71
8. 私が友だちに何かしてあげたとき、友だちがお返しをしてくれないといらいらする。	.63
14. 私が友だちを家の食事に招待したときは、友だちは何か飲み物やデザートを持って来てほしい。	.59
17. 私が友だちに対して良いことを言ったり、してあげたときは、感謝をしてほしい。	.59
33. 私が友だちにしてあげたようなことを、友だちができないときは、何か別の方法で私にお返しをしてほしい。	.57
5. クリスマスや誕生日に友だちとプレゼントを交換するとき、相手くれたプレゼントの方が値段が安い場合には、何だか嫌な気持ちになる。	.53
40. 友だちが何か目標を達成したとき(例えば、良い成績を取ったり、試合に勝ったりしたとき)、私がそれをほめたら、友だちも私に対して同じようにしてほしい。	.52
39. 友だちが困っているのを助けた場合、友だちは私に対して同じことをすべきだと思う。	.51
9. 私が出した手紙に対して友だちが返事をくれないなら、二通目の手紙を出したくない。	.47
36. 私が友だちにプライベートなこと(例えば、自分だけの秘密など)を話したときは、友だちも同じように私に何か話してほしい。	.45
28. 私が友だちを遊びに誘ったら、今度、友だちも同じように私を遊びに誘ってほしい。	.45
11. 私が週に3回友だちを遊びに誘うことがあれば、友だちも同じように週に3回私を遊びに誘ってほしい。	.43
25. 友だちと待ち合わせをしていて、その友だちが約束の時間に遅れてきたときは、いらいらする。	.42
22. 友だちにプレゼントを買うようなときは、これまでに友だちが私にくれたものを思い出して、それより高いものは買わないようにする。	.36
48. 友だちに何かしてあげるとき、友だちがすぐにお返しをしてくれるかどうかは気にしない。(-)	.34
1. 私は、友だちに何かしてあげたとき、そのことを忘れることはない。	.16
31. 私が友だちに本を貸したときは、友だちがそれを返してくれるまでずっと覚えている。	.16
44. 友だちが別の友だちと遊びに行くことがあれば、私も同じように別の友だちと遊びに行っても良いと思う。	.03
寄与率	22.30

註) 質問項目の前の数値は項目番号を表す。(-)がついた項目は逆転項目である。

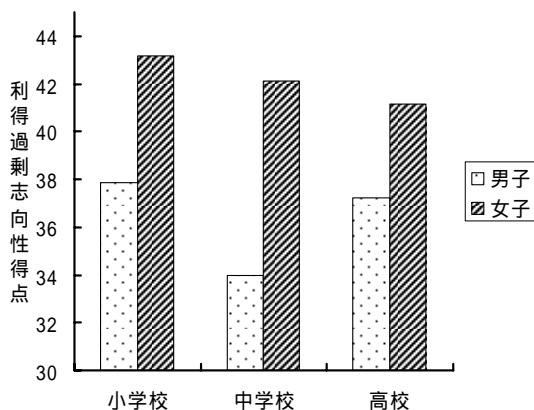


Figure 2 学校種別および性別ごとの利得過剰志向性得点

= 4.33, $p < .05$)、性別の主効果($F(1, 290) = 71.16, p < .01$)、および交互作用($F(2, 290) = 3.24, p < .05$)が有意であった。下位検定の結果、男子において、学校種別の単純主効果が有意であり($F(2, 290) = 6.30, p < .01$)、中学生の得点が小学生および高校生の得点よ

りも低かった($p < .01; p < .05$)。予備的分析の結果からは、特に、男子において、利得過剰志向性の発達の変化が確認された。ただし、利得過剰志向性と年齢の関係は1次の直線関係ではなく、中学生の時期を頂点としたU字型の2次の曲線関係であった。

本調査

目的

サンプル数を増やした上で、利得不足志向性及び利得過剰志向性の発達の変化を検討することを目的とする。併せて、性差も検討する。

方法

調査対象者 広島県内の公立高校1年生 262名(男子129名、女子131名、不明2名)、岡山県内の公立中学校2年生 223名(男子104名、女子119名)、広島県および岡山県内の公立小学校6年生 248名(男子124名、女子124名)。

調査手続き 各学級担任の先生が、ホームルームや放課後の時間を利用して調査を実施した。調査の実

Table 2 利得過剰志向性尺度の因子分析結果

質問項目	因子負荷量
43. 友だちが私に対して良いことを言ったり、してくれたりしたときは、感謝の気持ちを表したい。	.65
45. 友だちにしてあげることより、友だちがしてくれることの方が多いときは、申し訳なく思う。	.64
12. 友だちが私にしてくれたことを、私ができないときは、何か別の方法で友だちにお返しをしたい。	.60
23. 私が何か目標を達成したとき(例えば、良い成績を取ったり、試合に勝ったりしたとき)、友だちがそれをほめてくれたら、私も友だちに対して同じようにしたい。	.55
29. クリスマスや誕生日に友だちとプレゼントを交換するとき、相手くれたプレゼントの方が値段が高い場合には、申し訳ない気持ちになる。	.54
10. 私が困っているときに友だちが助けてくれた場合、私は友だちに対して同じことをすべきだと思う。	.53
50. 友だちと待ち合わせをしていて、私が約束の時間に遅れたときは、申し訳なく思う。	.51
37. 友だちの家の食事に招待されたときは、何か飲み物やデザートを持っていこうと思う。	.51
27. 私は、友だちが何かしてくれたとき、そのことを忘れることはない。	.51
6. 友だちが私を遊びに誘ってくれたら、今度、私も同じように友だちを遊びに誘いたい。	.49
21. 友だちが私にプライベートなこと(例えば、自分だけの秘密など)を話してくれたときは、私も同じように友だちに何か話したい。	.48
47. 友だちにプレゼントを買うようなときは、これまでに友だちが私にくれたものを思い出して、それより安いものは買わないようにする。	.43
35. 友だちが週に3回私を遊びに誘ってくれることがあれば、私も同じように週に3回友だちを遊びに誘ってあげたい。	.41
41. 友だちが何かしてくれたとき、お返しをしてあげることができないといらいらする。	.39
15. 友だちが何かしてくれたとき、すぐにお返しをすることができなくても気にならない。(-)	.28
3. 私が友だちから本を借りたときは、それを友だちに返すまでずっと覚えている。	.21
16. 私が別の友だちと遊びに行くことがあれば、友だちも同じように別の友だちと遊びに行っても良いと思う。	.20
32. 友だちから手紙をもらったとき、それに対して私が返事をする前に、二通目の手紙が送られてくることは好きではない。	-.20
寄与率	22.36

注) 質問項目の前の数値は項目番号を表す。(-)がついた項目は逆転項目である。

実施時期は2003年12月であった。

調査内容 予備調査によって作成された13項目からなる利得不足志向性尺度と利得過剰志向性尺度を用いた。

結果と考察

利得不足志向性尺度 全13項目の合計得点を利得不足志向性得点とした。係数は.84であった。予備的分析と同様に、利得不足志向性に発達差および性差が認められるかどうかを検討するために、学校種別と性別を独立変数、利得不足志向性得点を従属変数として2要因分散分析を行った(Figure 3)。その結果、性別の主効果が有意傾向であった($F(1, 668) = 3.64, p = .06$)。男子の方が女子よりも利得不足志向性得点が高い傾向にあった。

予備調査では、発達に伴って利得不足志向性が高まる可能性が示唆されたが、本調査の結果では、学校種別の主効果が認められなかった。こうした結果が、サン

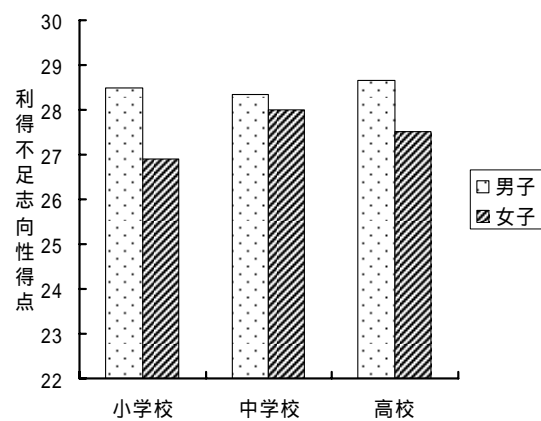


Figure 3 学校種別および性別ごとの利得不足志向性得点

ブルの相違によるものかどうかは定かではないが、一貫した結果を得ることができなかった。利得不足志向性が

発達に伴って高まるということを積極的に述べるためには、サンプル数をさらに増やすことや対象とする学年の範囲をさらに広げる必要がある。本研究では、年齢幅を考慮に入れて、小・中・高校生それぞれ1学年ずつを調査対象としたが、もし可能であるならば、小学1年生から高校3年生までの全ての学年を対象にして、発達差を検討してみることも有益であると思われる。こうした検討と併せて、尺度そのものの信頼性についても、再度、検討してみる必要がある。予備調査および本調査では、因子分析や内的整合性によって信頼性の検討を行った。今後は、縦断的調査を実施し、再検査法によって、利得不足志向性尺度の信頼性(安定性)を検討することも望まれる。

性差に関しては、本調査では、男子の方が女子よりも得点が高かった。Hatfield, Traupmann, Sprecher, Utne, & Hay(1985)は、衡平理論を親密な関係に適用した研究をレビューし、女性は利得不足状態に耐えられるけれども、男性はそうした状態によって過度に気分を取り乱しやすいことを見出している。このことは、男性の方が、女性よりも利得不足状態に対して敏感である可能性を示唆している。本研究の結果は、そうした可能性を裏付けるものである。一方で、大学生の恋愛カップルを対象にした Sprecher(1998)の研究では、利得不足志向性得点において有意な男女差が認められていない。Sprecher(1998)の研究では、利得不足志向性得点には、各項目の得点を合計し項目数で割った項目平均得点を用いられている。従って、本研究のように各項目の合計点を用いた場合と比べて、得点の分散が極端に小さくなる。このために男女差が認められなかった可能性が考えられる。あるいは、利得不足志向性の男女差に関しても発達の変化が存在し、年齢が低いときの方が男女差が大きく、年齢が高くなると男女差が縮小するのかも知れない。すなわち、小・中・高校生など年齢の低いサンプルでは、利得不足志向性の男女差が顕著に認められるが、大学生や大人など年齢の高いサンプルでは、たとえ男女差が存在しても、その差が小さいために、有意な差として検出されにくいのかも知れない。この点に関しては、今後、さらなる検討が必要であろう。

利得過剰志向性尺度 利得不足志向性尺度と同様に、全13項目の合計点を利得過剰志向性得点とした。

係数は.84であった。発達差および性差が認められるかどうかを検討するために、学校種別×性別の2要因分散分析を行った(Figure 4)。その結果、学校種別の主効果($F(2, 671) = 7.28, p < .01$)、性別の主効果($F(1, 671) = 82.16, p < .01$)、および交互作用($F(2, 671) = 4.21, p < .05$)が有意であった。単純主効果の検定を行ったところ、男子において、学校種別の主効果が有意であった

($F(2, 671) = 10.03, p < .01$)。多重比較の結果、中学生及び高校生の得点と小学生の得点の間に有意な差が認められ(いずれも $p < .01$)、小学生の得点が中学生および高校生の得点よりも高かった。

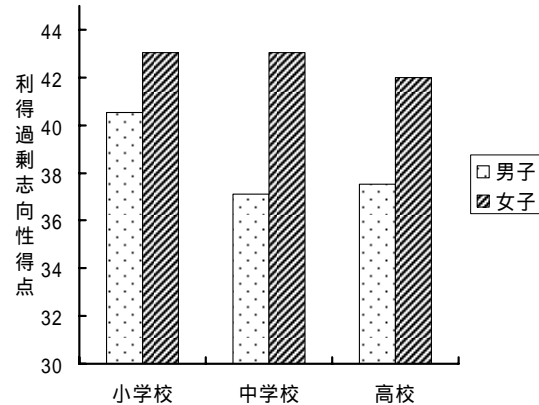


Figure 4 学校種別および性別ごとの利得過剰志向性得点

予備調査の結果では、本調査と同様に、男子において、利得過剰志向性の発達の変化が確認された。ただし、利得過剰志向性と年齢の関係は、中学生の時期を頂点としたU字型の2次線関係であった。利得過剰志向性は、利得不足志向性とは異なり、発達に伴って低下するのか、あるいは、中学生のある時期までは、低下して、それ以降、再び上昇するのか、さらに詳しい検討が必要であろう。女子においては、予備調査および本調査ともに、発達の变化は認められなかった。この点に関しても、女子は男子に比べて、利得過剰志向性が年齢的に早い段階で上昇し、しばらくの期間一定のレベルを保持するのか、あるいは、男子よりも遅い時期に低下し始めるのか、年齢幅の広いサンプルを用いて研究を行う必要がある。

性差に関しては、予備調査および本調査ともに、女子の方が男子よりも得点が高かった。先述の Hatfield et al.(1985)によると、利得過剰状態では、女性の方が気分的に混乱する傾向が高く、その一方で、男性はそうした状態にうまく対処できるようなのである。本研究の結果は、利得過剰状態に対しては、男性よりも女性の方が敏感であることを示唆するものである。ところで、Buunk & Prins(1998)が指摘しているとおり、利得不足状態では多くの人が幸福感を感じないけれども、利得過剰状態で幸福感を感じない程度は、個人によって大きく異なる。また、利得不足状態を認知するには、社会的公正について特別に敏感である必要はないけれども、利得過剰状態を認知するためには、それについて敏感である必要がある(Hatfield et al., 1985)。このことから、利得過剰状態における男女差は、対人志向性の違いを反映しているのか

も知れない。対人志向性は対人関係の多様な側面に対する反応性と他者の行動への関心の高さについての個人差変数である(斉藤・中村, 1987)。対人志向性の高い人は、他者が社会的公正などの規範から逸脱しているかどうかに関心が高い傾向が高い(Rubin & Brown, 1975)。こうした対人志向性は男性よりも女性の方が高いことが報告されている(斉藤・中村, 1987)。利得過剰志向性は、利得不足志向性よりも個人差が顕在化しやすく、本研究で見出された男女差は、対人志向性という個人差によっても説明できよう。最後に、先の Sprecher(1998)の研究では、利得不足志向性と同等に、利得過剰志向性においても男女差が認められていない。利得不足志向性の男女差に関する考察でも述べたように、得点の算出方法も含めて、利得過剰志向性における男女差の発達的变化について、今後、詳しく検討していく必要がある。

引用文献

- Buunk, B.P., Doosje, B.J., Jans, L.G.J.M., & Hopstaken, L.E.M. 1993 Perceived reciprocity, social support, and stress at work: The role of exchange and communal orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 801-811.
- Buunk, B.P. & Prins, K.S. 1998 Loneliness, exchange orientation, and reciprocity in friendships. *Personal Relationships*, 5, 1-14.
- Buunk, B.P. & Van Yperen, N.W. 1991 Referential comparisons, relational comparisons and exchange orientation: Their relation to marital satisfaction. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17, 710-718.
- Clark, M.S. & Mills, J. 1979 Interpersonal attraction in exchange and communal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 12-24.
- Clark, M.S., Ouellette, R., Powell, M.C., & Milberg, S. 1987 Recipient's mood, relationship type, and helping. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 94-103.
- Hatfield, E., Traupman, J., Sprecher, S., Utne, M., & Hay, J. 1985 Equity and intimate relations: Recent research. In W. Ickes (Ed.), *Compatible and incompatible relationships* (pp. 91-117). New York: Springer-Verlag.
- 楠見幸子・狩野素朗 1986 青年期における友人概念発達の因子分析的研究 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 31, 97-104.
- 諸井克英 1993 親密な関係の社会心理学(1): 共同の関係と交換的關係 人文論集(静岡大学人文学部社会科学・言語文化学科研究報告), 44 (1), 1-35.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友だちとのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- Rubin, J.Z. & Brown, B.R. 1975 *The social psychology of bargaining and negotiation*. New York: Academic Press.
- 斉藤和志・中村雅彦 1987 対人志向性尺度作成の試み 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学, 34, 97-109.
- Sprecher, S. 1992 How men and women expect to feel and behave in response to inequity in close relationships. *Social Psychology Quarterly*, 55, 57-69.
- Sprecher, S. 1998 The effect of exchange orientation on close relationships. *Social Psychology Quarterly*, 61, 220-231.
- 菅原健介 1985 青少年の友人関係の発達的变化と構造 東京都生活文化局(編) 大都市青少年の人間関係に関する調査 - 対人関係の希薄化の問題との関連からみた分析 - (pp. 115-118) 同局発行
- Taniguchi, H. & Ura, M. 2002 Support reciprocity and depression among elementary school and high school students. *Japanese Psychological Research*, 44, 247-253.

註

- 1) 本研究は文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の援助を受けて行われた。本研究の一部は 2004 年度日本心理学会第 68 回大会で発表された。調査にご協力いただいた先生方、ならびに児童・生徒の皆様へ深く感謝いたします。

The influence of intraindividual development on the relationship between support reciprocity and mental health:

Developmental changes of underbenefitting and overbenefitting exchange orientation

Hirokazu TANIGUCHI (*Research Fellow of the JSPS, Okayama University*)

Koji TANAKA (*Faculty of Education, Okayama University*)

The purpose of this study was to examine the reliability and validity of a revised and translated Japanese version of the original two scales for underbenefitting exchange orientation and overbenefitting exchange orientation (Sprecher, 1992), and to investigate developmental differences and gender differences of the two types of orientation. Underbenefitting exchange orientation shows one's concern about receiving less in return than one invests, and overbenefitting exchange orientation shows one's concern about receiving more in return than one invests. The preliminary study was administered to 102 first-year high school students, 100 second-year junior high school students, and 109 sixth-year elementary school students, while the main study was administered to 262 first-year high school students, 223 second-year junior high school students, and 248 sixth-year elementary school students. Item analyses resulted in a 13-item scale for underbenefitting exchange orientation, $\alpha = .83$, and a 13-item scale for overbenefitting exchange orientation, $\alpha = .83$. Elementary school boys scored higher in overbenefitting orientation than junior high school boys. Boys reported higher levels of underbenefitting orientation than girls, while girls reported higher levels of overbenefitting orientation than boys.

Keywords: underbenefitting exchange orientation, overbenefitting exchange orientation, elementary school students, junior high school students, high school students.